国立O病院を臨床実習場としての背景を異にする三校看護学生の実態比較調査

若林敏子・仙田洋子
宮崎和子

緒　言

看護教育に於いて臨床実習の占める割合は重くて大きい。それは時間数のみならず，内容からみても容易にうなづけるところであって，その充実はわれわれ臨床実習の指導に当たる者にとって常に重大な関心事といわねばならない。こうした事情から，すでに臨床実習の現状，分析，指導の方法など，多くの調査報告，研究がなされているところである。それにもかかわらず臨床実習に関するさまざまな問題は殆んどその姿をかえないまま存在しているのが現状である。

筆者らは特に臨床指導者として，学生の臨床実習の指導に直接たづさわってきた。その実習の場は主として国立O病院であり，この病院では，O病院附属高等看護学院，S高等看護学院，および筆者らの勤務する学校の三校の臨床実習が行なわれている。今回の調査はこれら三校とO病院の協力により，三校看護学生2，3年生およびO病院勤務の看護婦を対象として，臨床実習における看護学生の実情について具体的に調べたもので，その結果を報告し，今後の臨床実習指導のあり方について考察を試みた次第である。

調査対象

対象は昭和41年7月現在，国立O病院を実習病院とする看護学生2，3年生およびO病院勤務看護婦である。対象とした学生数および対象学生の背景は，表Iにしめすとおりである。

表I

校名	学校の背景	学年	配布数	回答数
A	母院を持たない県立短大附属看護学校3年生および県立短大看護科2年生で国立O病院に実習を依託し専任臨床指導者4名（主要4科）をもつ	2	28	28
		3	20	20
B	国立O病院附属高等看護学院で専任臨床指導者をもたない	2	35	35
		3	30	30
C	精神病院を母院として国立O病院に実習を依託し専任臨床指導者をもたない	2	17	17
		3	12	12
	計		142	142

看護婦は准看護婦6名および無回答の1名を除いた106名である。看護婦のうち60%（64名）は経験年数5年以内のものであった。

調 査 方 法

調査方法はアンケートによる択一式と，自由記述式を併せ用いた。学生に対しては各学校の許可を得たうえ，教室において一斉配布し30分後全員回収した。看護婦に対しては全員に配布し，一週間後回収した。回収率はいづれも100％であった。ここでは主に学生に焦点をあわせて調査結果を集計し，それぞれについてまとめた。

調査結果とその考察

本文および図表中の百分率は〔1〕―〔4〕では，各回答者数の各学年学生数，全学生数，および全看護婦数に対する割合であり，〔5〕は回答各項の人数の全回答者数に対する割合である。

〔1〕 学習意欲について

① 実習で自分が学ぼうとしていることがよく学べますか。（表Ⅰ―1）

回　　答	A，B，C校			A　校			B　校			C　校		
	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
1) よく学べる	4	4	5	4	0	10	5	9	0	3	0	8
2) まあまあ学べる	41	38	45	52	46	60	32	29	37	41	41	42
3) 何んとも言えない	25	26	24	17	14	20	28	26	27	38	47	25
4) 余り学べない	25	26	24	25	39	5	30	23	37	18	12	25
5) 全く学べない	3	4	2	2	0	5	5	9	0	0	0	0
6) 無回答	1	3	0	0	0	0	3	6	0	0	0	0

(1)よく学べる，(2)まあまあ学べる，と肯定的回答をしたものは45％で，これらのうち，(2)が大部分だが，まあまあ学べると言いながらも，理由をみると否定的回答者のそれと同じものが多く「雑用に追われる」「実習生の数が多いため，各自の行ない得る症例，検査が少くなる」「実習計画に追われる」など，現在の学習経験，計画に今後目を向ける必要をせまるものが多い。又，否定的回答(4)余り学べない，(5)全く学べない，あわせて27％の理由の中では「反復作業が多く広く学べない」としたものが特に目立つ。なかには「積極性がないため」で学習は学生の個人次第という自己反省を示すものが，かなりいる。又病院附属のB校の学生より，他の二校の学生に「学びたいことが学べる」と言っているのが目立った。

看護婦に対する「学生は指導する事に対して反応がありますか」（表Ⅱ―1）の調査では「実習態度」や「質問に対する答え」「学生の記録」などから65％の看護婦が肯定しているの

（表Ⅱ―1）学生は指導する事に対して反応がありますか。

回　　答	率　％
1) 充分ある	5
2) 大体ある	60
3) 何んともいえない	26
4) あまりない	9
5) 全くない	0
6) 無 回 答	0

である。これはかなり高率と思われるが，反面回答理由の第一が「個人差がある」であることから，指導方法に一層の工夫が必要と思われる。

② 実習中に自分の知識の不確実を発見した時，追求し勉強していますか。（表Ⅰ－2）

回答	A，B，C校			A校			B校			C校		
	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年
1) 必ず追求している	8%	11%	5%	6%	7%	5%	18%	14%	7%	7%	12%	0%
2) たいてい追求している	39	43	34	47	54	35	38	43	33	28	24	33
3) 追求することもありしないこともある	46	39	56	48	36	60	40	31	50	62	59	67
4) 余り追求しない	6	6	5	2	4	0	10	9	10	3	6	0
5) 全然追求しない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6) 無回答	1	1	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0

肯定的回答は(1)必ず追求している，(2)たいてい追求している，あわせて47%であった。その理由には「不確実を知り，その都度勉強するとよく理解できる」「患者から信頼を得られるよう常に努力し良心的看護をしたいから」などをあげている，全般に肯定的回答をしているものがB校に多い。これはB校の学生が，もっとも意欲が高いと考えられるし，又，学校が近く図書室の利用が比較的容易であることなど，環境に恵まれているためとも考えられるが，さきの設問①においてB校学生に否定的回答が多かった事を考え併せると，消極的態度と言うより，むしろ学ぼうとする意欲が高いためのものである，とも考えることが出来る。又(3)追求することもありしないこともある，と答えた46%，否定的回答の6%は理由として「積極性に乏しく，そのままになりがちである」「実習の疲労が大きいため予習復習ができない」などを挙げているが，三ケ年の教育期間中，臨床実習に費やす時間は膨大なものであるだけに，常に研究的雰囲気の中から，より学び易い環境を整えるべく努力をつづけ，これらの学生にもっと積極的，意欲的実習態度を持たしめることが指導上の課題であろう。それは又，この調査の課題でもある。

③ 教室で学んだ原理を実習場で応用する機会がありますか。（表Ⅰ－3）

回答	A，B，C校			A校			B校			C校		
	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年
1) 常にある	13%	15%	10%	19%	14%	25%	11%	17%	3%	6%	12%	0%
2) 大体ある	58	53	65	64	64	65	51	37	67	63	65	58
3) 何んとも言えない	20	23	18	10	14	5	24	29	20	27	24	33
4) あるとは言えない	5	5	5	4	7	0	6	6	7	4	0	8
5) 全くない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6) 無回答	4	5	3	3	0	5	8	11	3	0	0	0

ここでは回答(2)大体ある，が全学生の58%を占めていることが目立つ。回答理由をみると，(2)大体ある，と(3)何んとも言えない，に共通するものが多く，あわせて80%の高率にのぼっ

ている，その主な理由は「病棟での操作と教室で学んだことにくいちがいがある」「病棟に看護物品がそろっていない」などで，看護原理で学んだことが，すぐそのまま実習病院で行なわれなければならないかの如く考えているものが多く，一方(1)常にある，と答えた13%の理由の大半が「実習は原理の上に成り立っているから」「教室での授業は実習場で応用されるためにあるといっても過言ではない」という理解を示すものであることからも，看護原理というものの意味を充分に理解するよう教育しなければならないであろう。

④　あなたは看護に誇りをもっていますか。（表Ⅰ－4）

回　　答	A，B，C校			A　校			B　校			C　校		
	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
1) 持っている	49	43	58	38	29	50	52	43	63	63	65	58
2) どちらでもない	39	48	27	46	61	30	37	46	27	28	30	25
3) 持っていない	8	6	11	15	11	20	5	3	7	7	6	8
4) 無 回 答	4	4	3	0	0	0	6	9	3	4	0	8

全学生では(1)持っている，の回答者49%であった。その理由は「生命をあづかっている職業であり，やりがいがある」「患者から信頼感を持たれたり感謝の言葉を聞いた時にやりがいを感ずる」など非常に素朴な感情からくるものが多い。(2)どちらでもない，(3)持っていない，の回答の内容には共通するものが多いので，両者を同一回答とみた。その比率は47%であった。すなわち「まだ勉強中で誇りを持ってする段階ではない」「自分のすることに自信がもてない」など看護に対する模索の段階にあるものが多く，なかには「誇りをもつが社会の目も気になる」「看護という職業にそれ程興味を持っていない」ものも数人いる。そして学年別にみると(1)もっている，と答えたものが，2年43%，3年58%であり，反対に(2)どちらでもない，(3)持っていない，の支持が2年53%，3年39%となっている。

2年生は各科実習がはじまって間もなく，看護についても，看護学生という身分についても欠点や矛盾が目につきはじめた頃であり，これは看護の学問的，社会的地位とも関連して看護教育の基本にふれる問題を提起しているように思われる。

一方看護婦に行なった調査では，学生の「看護に対する誇り」（表Ⅱ－2）は「熱心で真面目な態度」「患者の申し出によくこたえる」等，主として表面的観察から，46%が肯定している。これは学生における調査結果と，ほぼ一致する。しかし，設問そのものが「誇り」という内面的なものをたづねるという無理があり，しかも，それ程深い人間関係の作りきれない実習指導場面では，表面的推察にならざるを得なかったであろう。

（表Ⅱ－2）学生は看護に対して誇りをもっていると思いますか。

回　　答	率　%
1)　大いに持っている	8
2)　大体持っている	38
3)　どちらともいえない	42
4)　あまり持っていない	12
5)　全然持っていない	0
6)　無 回 答	0

〔2〕 受け入れ側の態度および指導意識について

① 実習場は学習的雰囲気がありますか。（表Ⅰ－5）

回答	A，B，C校			A校			B校			C校		
	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年
1) 大変ある	5%	6%	3%	13%	18%	5%	0%	0%	0%	3%	0%	8%
2) 大体ある	29	33	24	31	28	35	20	23	17	45	59	25
3) どちらとも言えない	44	38	52	40	36	45	48	37	60	41	41	42
4) あるとは言えない	19	21	16	15	18	10	29	34	23	3	0	8
5) 全くない	1	1	2	2	0	5	2	3	0	0	0	0
6) 無回答	2	1	3	0	0	0	2	3	0	7	0	17

(3)どちらともいえない，と答えたものが44%と意外に多いのは「実習場」という言葉では病棟差が表現しきれず中庸をとらざるを得なかったように思われる，このことは理由に「病棟差あり」としたものが圧倒的に多かった事からもうなづける。一方肯定的回答が，(1)大変ある，(2)大体ある，をあわせて34%と比較的高い。これは学生が観察しているように，「常に看護婦が研究的，協力的で指導に心がけているから」であろう。これはわれわれにとって大へん心強い。さらにここで，特徴的なことは，否定的回答が平均20%あり，その中でB校の学生に特に多かったことである。B校2，3年生，あわせて31%，少ないC校2，3年生あわせて8%であった。その理由は「雑用が多い」「病棟および記録室は多忙なために全く学習的でない」などとなっている。これは附属校としてのB校学生の実習場に対する学習的要求が，他校に比して高いことによるものかと思われる。

② スタッフ，ナースは実習に対して指導的ですか。（表Ⅰ－6）

回答	A，B，C校			A校			B校			C校		
	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年
1) 非常に指導的である	10%	15%	3%	19%	29%	5%	6%	9%	9%	3%	6%	0%
2) 大体指導的である	51	56	44	48	46	50	49	54	54	59	76	33
3) どちらとも言えない	34	28	42	27	25	30	38	34	34	34	18	58
4) 指導的ではない	4	0	8	4	0	10	5	0	0	0	0	0
5) 全く指導的でない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6) 無回答	2	1	3	2	0	5	5	3	3	3	0	1

肯定的回答は(1)(2)あわせて61%であり，「常に学習的であり，質問すれば重点的に教えてくれる」と言っている。これは看護婦における調査で，約80%の看護婦が「学生指導を看護業務の計画に組み込まれている」（表Ⅱ－3）ことや「学生指導を看護業務の一部と理解している」（表Ⅱ－4）ものが看護婦の76%を占め，管理者もスタッフ，ナースも相当高い指導意識をもっていることからも推察出来る。しかし「学生指導に興味がありますか」という質問（表Ⅱ－5）

（表Ⅱ－3）学生指導はあなたの看護業務の計画に組まれていますか。

回　　答	率　%
1)　組まれている	33
2)　ある程度組まれている	46
3)　どちらともいえない	13
4)　あまり組み入れられていない	8
5)　全然組み入れられていない	1
6)　無 回 答	0

（表Ⅱ－4）学生指導は看護業務の一部であると考えますか。

回　　答	率　%
1)　考 え る	52
2)　ある程度考える	24
3)　どちらともいえない	8
4)　あまりない	13
5)　全く考えない	3
6)　無 回 答	0

（表Ⅱ－5）学生指導に興味がありますか。

回　　答	率　%
1)　大変ある	17
2)　まあまあある	42
3)　どちらともいえない	17
4)　あまりない	22
5)　全くない	2
6)　無 回 答	0

に対して，肯定的回答58%，否定的回答24%であったことは，この高い指導意識が「指導に対する責任」「教育に対する義務感」にささえられていることを物語るものではないだろうか。又学生側調査で看護婦の指導性について「病棟差あり，個人差あり」と指摘したものが全学生中約40%もいたことは，個人の特質と共に各病棟管理者の指導意識の相違によるものと思われる。

③　実習場で医師は実習に対して協力的ですか。（表Ⅰ－7）

回　　答	A，B，C校			A　校			B　校			C　校		
	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年
1) 協力的である	7%	8%	6%	10%	7%	15%	8%	11%	3%	0%	0%	0%
2) 大体協力的である	23	20	27	17	14	20	31	29	33	17	12	25
3) どちらとも言えない	44	40	48	46	39	55	38	34	43	52	53	50
4) 協力的とは言えない	19	23	15	15	18	10	18	23	13	28	30	25
5) 全然協力的でない	6	9	3	13	21	0	3	0	7	3	6	0
6) 無 回 答	1	1	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0

肯定的回答をしたものは30%で，その理由に「質問に対しては協力的な医師が多い」をあげている。又(3)どちらとも言えない，と回答したものが44%と高率なのは「医師によって異なる」「実習場所によって異なる」などこの質問においても問①②と同様，病棟差，個人差があるためと思われる。なお否定的回答25%の理由として「医師の行動はあまりにも学生と離れす

ぎている」が多かった。これを学校別に，しかも実習に入って間のない２年生についてみると，Ｂ校の肯定的回答が40%であるのに対し，Ａ校は20%，Ｃ校は12%である。これはＢ校が病院附属であるため，授業が殆んど実習病院の医師によって行なわれていることから，教室においてすでに両者間にコミュニケーションができあがっているからではないだろうか。このことは３年生になれば，Ｂ校36%に対し，Ａ校35%，Ｃ校25%というように次第にこうした傾向は少なくなることからもうかがえる。Ａ校２年生の場合，調査当時は週１日の実習が始まったばかりの状況であり，医師はじめ医療関係者との接触機会が少なかったこと，一方Ｃ校２年生はＢ校２年生と，臨床実習開始はほとんど同時期であるが母院でない，ということ，学生数が少ないこと等からくる遠慮が，この様な結果をもたらしめたのだろうか。医師より有効な教育的協力を得るためには，ある程度以上のコミュニケーションを成立させる必要があることを物語っている。一方すでに行なっている臨床講義，カンファレンス，などについても一層の工夫が必要であろう。

〔3〕 実習方法について

① 実習計画のたて方についてどう思いますか。（表Ｉ－８）

回答	Ａ，Ｂ，Ｃ校			Ａ校			Ｂ校			Ｃ校		
	全員	２年	３年	全員	２年	３年	全員	２年	３年	全員	２年	３年
1) 学生個人で全部立てた方がよい	33%	23%	47%	27%	4%	60%	42%	40%	43%	24%	18%	33%
2) 学生の１人がグループ全部の計画を立てた方がよい	1	0	3	2	0	5	2	0	3	0	0	0
3) 指導者が全部立てた方がよい	14	9	21	6	7	5	18	15	23	17	0	42
4) 時々自分で立てた方がよい	46	63	24	60	86	25	31	37	23	55	76	25
5) わからない	2	1	5	2	0	5	3	0	7	3	6	0
6) 無回答	2	5	0	2	4	0	5	9	0	0	0	0

回答(1)学生個人が全部たてた方がよい，(2)学生の１人がグループ全部の計画をたてた方がよい，(4)時々自分でたてた方がよい，をあわせて約80%の学生が何んらかの形で自分の意見を実習内容に取り入れようとしている。３年生は自分で計画を全部たてたいとした学生が約半数もおり，２年生では時々自分でたてたい学生が半数以上もいる。この理由をみると「自分で希望していたことがある程度出来る」がもっとも多く「計画性，積極性が養われる」「自分のペースでしたい学習が出来る」など自主的学習を望むものが大部分である。なお(2)学生の１人がグループ全部の計画をたてた方がよい，この理由で目立ったものは２年生の「病棟および患者把握が充分できないから指導者と学生が話し合いの上で計画したら充実した内容になる」である。３年生はさすが実習内容を積極的に自分で計画しようとし，２年生は時々こうしたことをしてみたい，と積極性の兆をあらわしているのがはっきりとみられ，２年生と３年生の相違が出ている。学校学年別の特徴としては，Ａ校２年生の(1)学生個人が全部たてた方がよい，が４%，(4)時々自分でたてた方がよい，が86%と他校に比してかなりの相違がみられる事である。Ｂ校２年生では(1)が40%，(4)が37%と逆に少差ではあるが(4)が少ない。この理由として考えることは，Ａ校２年生は短大生として基礎実習が始ったばかりであり，臨床場面の把握が不十分な段階であることが考えられる。しかし一方，Ｃ校２年生の実習はＢ校２年生と殆んど同時期

に実習を開始し，実習週数にも大差ないにもかかわらず調査結果はむしろA校に近似している点を考えれば，母院における実習と母院を持たざる実習の相違かとも思われる。この疑問解決は，計画のたて方，学生の積極性の相違および他の設問における問題とも関連して今後の課題となるものである。

② 実習中に空白な時間がありますか。（表Ⅰ－9）

回答	A，B，C校			A校			B校			C校		
	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年
1) ある	11%	14%	10%	15%	18%	10%	12%	11%	13%	7%	12%	0%
2) 時々ある	49	41	55	42	40	45	48	37	60	55	53	58
3) 何んとも言えない	10	5	16	15	11	20	6	0	13	10	6	17
4) ほとんどない	23	30	13	21	29	10	22	31	10	28	29	25
5) ない	8	10	5	6	3	10	12	20	3	0	0	0
6) 無回答	1	0	2	3	0	5	0	0	0	0	0	0

(2)時々ある，が約半数を占め(1)ある，とあわせて60%の学生が一応これを肯定している。(1)(2)の理由の大部分が「実習生の多い日」「計画されたことをし終った時」「実習場により差あり」などであることから推察すれば必ずしもこれは，常に学生の自由になる時間がある，ということを意味するのではない。したがって学生が「空白である」と受取っている時間については更に検討し，この活用方法を考えねばならない。(4)ほとんどない，(5)ない，の主な理由は「受持患者の看護に実習目的を持っているから」「労務提供の感あり多忙」が多い。他に「空白な時間は学生の個人次第」「勉強することはいくらでもある」と少数乍ら，甚だ意欲的，積極的なものがあることからも，空白と受取っている時間が指導次第では学習的に活かし得る時間であると思う。

③ 毎日の実習は計画的になされていると思いますか。（表Ⅰ—10）

回答	A，B，C校			A校			B校			C校		
	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年
1) 計画的である	14%	16%	11%	19%	21%	15%	9%	11%	7%	17%	18%	17%
2) ある程度計画的である	49	41	60	52	46	60	43	30	60	59	59	58
3) どちらとも言えない	10	13	8	13	15	10	12	14	10	3	6	0
4) 余り計画的でない	24	29	17	16	18	10	34	43	23	17	18	17
5) 全く計画的でない	1	1	0	0	0	0	2	4	0	0	0	0
6) 無回答	1	0	3	2	0	5	0	0	0	3	0	8

63%の学生が肯定的，25%弱の学生が否定的回答をしている。肯定した理由をみると「計画表にしたがっているから」が大半を占め「計画的だが患者の状態により崩れる」が少数ある。又肯定，否定を問わず多かったものに「予定より時間がかかったり，病棟の状況により思うようにいかない」がある。もともと実習は臨床場面の動きの中において計画されるものであるから，ある程度余裕を持たさざるを得ない。したがって先の設問②に関連して時間の活用法を指導すべきであろう。

④　経験項目を実施するにあたって責任を持たされていますか。（表Ⅰ—11）

回　　答	A，B，C校			A　校			B　校			C　校		
	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年
1) 常に持たされている	17%	20%	14%	21%	21%	20%	15%	22%	7%	17%	12%	25%
2) 大体持たされている	55	50	61	54	50	60	48	34	63	72	82	59
3) 何んとも言えない	14	18	10	10	11	10	20	29	10	7	6	8
4) 持たされているとは言えない	10	11	10	11	18	5	14	11	17	0	0	0
5) 全く持たされていない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6) 無 回 答	3	1	5	2	0	5	3	4	3	3	0	8

70%以上の学生が肯定的であった。この理由をみると少数の否定的回答をも含めて「最終的責任は看護婦に」がもっとも多い。この他肯定的理由には「看護行為にはすべて責任を伴う」が多く「経験項目，実習場所により異る」が少数ながらある。この回答での特徴は2，3年生共にC校，A校，B校の順に肯定的回答が多かったことである。最も多いC校2年生は94%，最も少ないB校2年生は56%であった。この調査では原因は明らかでないが，実習病院を他に求め，専任臨床指導者を持たない学校の学生が責任という事により敏感であるとも考えられる。

⑤　実習は責任を持った方が学習効果があがると思いますか。（表Ⅰ—12）

回　　答	A，B，C校			A　校			B　校			C　校		
	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年
1) 大変ある	61%	55%	68%	63%	58%	70%	58%	54%	64%	62%	53%	75%
2) 大体ある	26	29	23	20	21	20	26	28	23	34	41	25
3) どちらとも言えない	10	12	6	15	21	5	9	9	10	3	6	0
4) 余りない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5) 全くない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6) 無 回 答	3	4	3	2	0	5	6	9	3	0	0	0

(3)どちらとも言えない，の回答者が10%ほどいるが否定的回答者は1人もいない。理由をみても「責任を持たされることによって自信もつき，意欲的な学習心，注意力，正確さが養われ，しかも覚えが早い」ことを大部分の学生が指摘している。しかし反面，効果を認めながらも「失敗により恐怖心や自信喪失が起る」「責任が重いと実習に対して気が重い」という学生も少数いることを忘れてはなるまい。

看護婦における調査「与えた実習項目を責任をもってやりますか」をみると（表Ⅱ—6）（表Ⅱ—6）与えた実習項目を責任を持ってやりますか。

回　　答	率 %
1) 充分やる	6
2) 大体やる	64
3) 何んともいえない	25
4) あまりやらない	4
5) 全くやらない	0
6) 無 回 答	1

肯定的回答が70%を占め，否定的回答は4%にすぎない。これは指導者側の責任に対するオリエンテーションが，かなり徹底していることと共に，学生自身責任を持つべきであるという義務感と学習効果を認めている結果が，看護婦の高い肯定率に表われたのではないだろうか。しかし肯定者を含めて全看護婦の33%が「学生に個人差あり」「中途半端なことをする」と指摘しているのをみると，必ずしも望ましい態度であると安心はできないであろう。学生に学生の立場での責任をもたすことは単に業務管理上の問題ではなく学生の主体性を重んじ学生を信頼することである。これは教育の基本にふれる問題でもあろう。さきの問①実習計画に対する意見とも考えあわせ，実習時間を学生自身のものとして自覚させることと関連している。

⑥　自分に対して行なわれた評価について満足していますか。（表Ⅰ—13）

回　　答	A，B，C校			A　校			B　校			C　校		
	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年
1) いつも満足している	1%	0%	2%	2%	0%	5%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
2) 満足することが多い	5	5	5	6	7	5	6	5	7	0	0	0
3) どちらとも言えない	67	69	66	66	61	65	69	74	63	72	71	75
4) 不満がちである	18	14	22	16	11	20	18	9	27	24	29	17
5) いつも不満である	3	2	5	5	3	5	3	3	3	3	0	8
6) 無 回 答	6	10	0	4	18	0	5	9	0	0	0	0

(3)どちらとも言えない，の回答者が約70%を占めているが，これを除くと不満とする傾向が強いといえる。少数の満足者をも含めて，その理由には「短い実習時間ではよくわからないと思う」「評価の基準があいまいである」「1つの事で全体を評価するのは一面的である」「評価者により差がある」など評価の客観性の乏しさについて手きびしい批判をしたものが大部分を占めていた。このことは評価する側においてもつねづね問題となるところであり，次の設問における問題と共に検討してみたいと思う。

⑦　実習評価をみることは役に立っていますか。（表Ⅰ—14）

回　　答	A，B，C校			A　校			B　校			C　校		
	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年	全員	2年	3年
1) 大変役に立っている	14%	16%	9%	20%	21%	20%	8%	11%	3%	14%	18%	8%
2) 大体役に立っている	18	23	13	19	18	20	20	26	13	14	23	0
3) どちらとも言えない	33	26	42	35	29	45	32	28	37	31	18	50
4) 余り役に立たない	25	20	32	13	11	15	29	17	44	38	41	34
5) 全然役に立たない	4	5	2	2	3	0	6	9	3	0	0	0
6) 無 回 答	6	10	2	10	18	0	5	9	14	3	0	8

肯定的回答が(1)(2)あわせて30%強であるが，これはさきにみられた実習評価に対するかなり低い満足度とは逆に，比較的評価の効果を認めていると考えてよかろう。これは個人面接，具体例の記入等，病棟側の評価に対する努力の現われであるとも思われる。全体的にみて2年生

がより肯定的であるが，これは実習初期で自己評価が不十分な段階であり，他からの評価が直接的に役に立っていると思われる。肯定的回答では「反省資料」「今後の計画，目標が立てられる」がその主なものである。反面，否定的回答の30%では「評価を信頼していない」「納得のいかないものは重視しない」が多数を占め，前問の理由に相通ずるものがある。学生達は信頼していない評価の効果を認めている。逆に言えば効果のある評価を信頼していない。この矛盾は学生の自信過剰による甘えから来るものと考えてよいであろうか。ここに自分に対して行なわれた評価は不満足であると考えながらも評価は役に立つと答えている者の割合をみると（表Ⅰ—14—1），2年生が3年生より高率である事，B校が2，3年生共に他校よりもこの傾向が強いことが目立つ。これは先きにのべたように，2年生は自己評価が不十分であるため他からの評価が役に立っていると考えられる。またB校に高率であるのは，自己評価の基準がすでに出来あがっているかも知れないことと共に，学習に対する要求度が他に比して高いのかもしれない。あるいは指導者側で学校によって評価の教育的使用法に差があるのかと考えられる。このことについては，すでに報告されたものからみても，この種の評価にはどうしても指導者の主観が入り易く一沫の不安が残る。評価方法の改善が希まれる次第である。

（表Ⅰ—14—1）評価を不満足と言いながら役に立つと答えているものの割合

校名	学年	率 %
A校	2年	25
	3年	0
B校	2年	75
	3年	22
C校	2年	40
	3年	0
A，B，C校	2年	46
	3年	12

〔4〕 病院に対する影響について（看護婦のみ）

① 学生が実習にくることは実習病院の看護のレベルに影響があると思いますか。（表Ⅱ—7）

(3)どちらとも言えない，が31%あった。影響ありとしたもののうち「悪影響あり」としたものはわずか2%であった。(1)(2)の「好影響あり」（67%）の理由をみると「刺戟による学習意欲，研究心の向上」が大部分であり，看護婦自身のレベル・アップに対する意欲を示すものではないだろうか。また少数ながら「看護サービスの密度が高くなる」といった学生による看護婦不足の補充を意味するものもあった。(4)悪影響がある，の理由には「学生が多いため室内汚染と騒音が起る」「患者に不安感を与える，心身の安静を妨げる」「練習台的感じをもつ」が少数づつあった。

（表Ⅱ—7）学生が実習にくる事は実習病院の看護レベルに影響があると思いますか。

回答	率 %
1) 好影響がある	21
2) 大体好影響がある	46
3) どちらとも言えない	31
4) 悪影響がある	2
5) 悪影響が多い	0
6) 無回答	0

② 学生はあなたの看護業務の能率にどのように影響しますか。（表Ⅱ—8）

能率があがると答えたものの方がやや多い。これは「学年差，学生の個人差，業務内容による」から「ある程度の指導ののちは能率があがる」更に「手助けとなり業務上意味がある」という場合さえある。しかし全体の35%は「指導と業務にエネルギーが二分される」「学生数が多すぎる」などの理由をあげて能率低下を訴えている。この問に対する特徴は，病棟差が著る

（表Ⅱ－8）学生はあなたの看護業務の能率にどのように影響しますか。

回　　答	率　%
1) 大体能率があがる	8
2) 少しは能率があがる	36
3) どちらでもない	20
4) 少し能率がさがる	28
5) 非常に能率がさがる	8
6) 無 回 答	0

（表Ⅱ－9）患者は実習学生をどう思っていますか。

回　　答	率　%
1) 大変よろこんでいる	18
2) まあまあよろこんでいる	55
3) 別に何んとも思っていないようだ	19
4) あまりよろこんでいない	4
5) いやがっている	1
6) 無 回 答	4

しいことである。院内での一般評として学生教育に熱心であるといわれている病棟ほど能率向上に対して否定度が強く，指導にあたっている看護婦にはかなりの負担が，かかっていることが伺える。

③　患者は実習学生をどう思っていると考えますか。（表Ⅱ－9）

「喜んでいる」と答えているものが73%，「よろこんでいない」と観察している人はわずか5%であった。患者と学生の間に抵抗は少ないとみてよいのではないだろうか。多くの看護婦が「サービスが行き届き喜ばれる」「親切，丁寧，素直，誠実で新鮮味をもち患者の要求に答える」など肯定的な面を認めている。しかし反面，肯定者を含めて全体の約¼の看護婦が「患者は学生の処置，技術に対しては不安感をもっている」ことを指摘している。又「軽症者では喜ばれるが重症者は信頼していない」という観察も数例ある。これは，生まの人間を扱う臨床場面に於いて，学生の自主性尊重の名に甘えた冒険，あるいは放任は，厳につつしまねばならない一面を物語っている。

〔5〕 専任臨床指導者に望むもの

（表Ⅰ－15）　学　生　側

回　　答	率　%
1) 学校差なく各学生に平均した指導をしてほしい	15
2) したしみ易く気軽に質問できるようであってほしい	14
3) 各科にいてほしい	12
4) 学生の側に立った指導者であってほしい	11
5) その科をよく知って（病棟内容，患者把握を含む）理論と実際をふまえた指導をしてほしい	8
6) 指導者の所在，行先を明確にしてほしい	4
7) 学生，病棟，学校間の連絡を密にしてほしい	4
8) そ の 他	32

この質問の回答を自由記述にしたところ，全学生の15%が(1)学校差なく各学生に平均した指導をしてほしい，と述べており，そのうちC校2年生が60%を占めている。これは臨床実習を他病院に求めたためで，しかも実習のごく初期において，全く不案内の2年生が病棟オリエン

テーションを含めて指導者を求めるのは当然の事であろう。A校からは最低数ながら，主要4科（内科，外科，産婦人科，小児科）に臨床指導者が出ていること，又B校はこの病院附属の看護学院であることからみても，看護婦，医師の指導を得やすく，とかくC校学生に指導が行き届かなかったものであろうか。また(2)したしみ易く気軽に質問できるようであって欲しい，と述べた14%中90%までがA校2年生であり，現在指導者のいる4科だけでなく「学生が実習に出る各科にいて欲しい」という要求が，指導者の配置されていないC校よりも強い形で現われているのは興味深い。(3)各科にいて欲しい，(4)学生の側に立った指導者であって欲しい，(5)その科をよく知って（病棟内容，患者把握を含む）理論と実際をふまえた指導をして欲しい，とすべて実習にかなりの自信と余裕をもつことが出来る3年生から集中的に出された意見である。これは指導者をかなり批判的にみており，制度上の問題もからんではいるが，より有能な専任の臨床指導者を期待しているものと思われる。

（表Ⅱ—10）　看　護　婦　側

回　　答	率　%
1)　学生指導には全面的に責任をもってほしい	24
2)　実習生のいる所，各病棟に1名づつはいてほしい	19
3)　その病棟において臨床経験を積んだ人で看護の実際を理解してから指導してほしい	12
4)　できればスタッフ・ナースであってほしい	12
5)　礼儀作法，言葉づかい，電話のかけ方，服装等細々とした人間教育にも指導注意してほしい	10
6)　専門職者としてのみでなく人間的な人であってほしい	2
7)　そ　の　他	24

一方，看護婦における記述（表Ⅱ—10）をみると全体的にみて4～6年の経験をもつ看護婦から意見が圧倒的に多かった。これは看護婦不足の折，多忙の看護業務の中で，学生指導に関しては数年の経験をもつ中堅看護婦にかなりの負担がかかっていることを表わしていよう。さらにこれを分析すれば，(1)学生指導には全面的に責任をもってほしい，と述べたもの24%中，1～3年の経験看護婦が⅓，4～6年の経験看護婦が⅓を占めており，(2)実習生のいるところ各病棟に1名づつは居て欲しい，と述べた10人のうち1～3年の経験看護婦が半数を占めている。このことからも学生への実際的な指導が若い看護婦によってなされていることが推察され，その負担を少しでも軽くして欲しいとの希望が，以上のような回答となって表われたものとみてよいであろう。又(3)その病棟において臨床経験を積んだ人で看護の実際を理解してから指導して欲しい，の意見は，経験年数に関係なくかなり広範囲の看護婦から出されている。

結　　語

以上筆者らは，O病院における臨床実習学生142名およびこの病院に勤務する106名の看護婦について実情調査を行なった結果，次の様な諸項を知り得た。

〔1〕 学習意欲について

(1)　教室における講義ならびに教室実習が，どのように臨床実習場面に生かされるかという両者の関連づけに対してより一層の教育がのぞまれる。

(2) 実習計画，責任，評価における調査で，学生の自主性尊重の重要性が認められた。学習意欲助長のため，自主性の活用法が一層考えられるべきである。

(3) 多くの看護婦から，学生に個人差があることが指摘され，個人指導の必要性，重要性が再認識された。現実に学生数は多く専任指導者は少ない。より充実した指導のため各科に専任臨床指導者の配置がのぞまれる。

(4) 学生に学校差がみられた。各校の教育方針を徹底充実し，重ねて学生のもつ背景差によるマイナスをなくしてより有効な実習ができるよう援助しなければならない。そのために各校において各科専任指導者が必要である。

(5) 各実習場に教具，教材，図書等の設備の充実がなされるべきである。

(6) すでに行なっている臨床講義，カンファレンスなど教育場面の工夫が一層必要である。

(7) 3校学生実習においては，より実習効果を高めるようなカリキュラムを編成すべきである。そのために3校教務の一層の討議が必要と思われる。

〔2〕 受入側（実習病院）について

(1) 学生が「雑務」と受け取っているものについて，その受け取り方，受け取らせ方を検討し，より有効な学習効果をあげるよう整理しなければならない。

(2) 学生時代から後輩指導の理念を培っておくことが大切である。これは看護婦となり管理者となった時，よき教育的雰囲気をもつ病棟を作る基礎となるであろう。

(3) 医師その他医療関係者の理解と協力を得るために，臨床指導者はより積極的な橋渡し的役割をもつべきである。

〔3〕 実習方法について

(1) 空白な時間と考えているものを，余裕のある時間，考える時間，まとめる時間として活用することに関心と学習的よろこびをもたせる配慮が必要である。

(2) 評価の第1の目的は，あくまでも「望ましい行動の変化」であって単に型式的な評価のための評価であってはならない。評価の方法に一層の工夫がなされねばならない。

〔4〕 病院に対する影響について

(1) 学生実習がよき刺戟となっている指導意識が看護婦不足による多忙のため十分活用できない，あるいは過重労働という個人負担になっている現状を解決するために各科に専任指導教員の配置がのぞまれる。

(2) 患者からは多く喜ばれているが，重症患者に対する看護，あるいはより専門的な看護処置に対しては有資格者の十分な指導と監督がなされねばならない。

学生側，実習受入側と同様，患者側からみても，専任指導者の各科配置がのぞまれる次第である。

すでに，各実習場でさまざまな工夫配慮がなされているにもかかわらず，以上のようにまだまだ多くの未解決の問題を残す臨床実習指導において，筆者らは一つ一つの解決のために努力して行きたいと思う。

稿を終えるにあたり，調査に御協力下さいましたO病院の看護婦諸姉，ならびに3校看護学生の皆さんに厚くお礼申しあげます。また終始，御指導いただきました水野知文主任教授および関係の諸先生に深甚なる謝意を表します。

参 考 文 献

金子　光：保健婦助産婦看護婦法解説，中央医書出版社，昭和40年
看護教育：VoL 6，№ 7，1965
柴田明子他：看護学生，医学書院，1964
村上登美訳：臨床指導の手引，医学書院，1965
鈴木敦省：評価の技法，医学書院，1962
看護教育：VoL 6，№ 2，1965
看護教育：VoL 8，№ 3，1967